こうした経験がどうして起るのかは今でも分らない。ただ言えることは、する世界ではなく、訪れてくる世界、なっていく世界のようである。決して、意識的、意図的にどうのこうのできるレベルのことではないということだけは、はっきりと感じている。

この経験から私は、自分の目で見、自分の耳で聴き、体でたしかめながら自分自身の概念を組み立てていくことの大切さが分ったのである。そしてこれを契機として私の保育のあり方や、子どもの見方が大きく変ったのである。丁度、十年前のできごとであった。

人間というものは、そもそも変転憂苦の連続の世界をさまよいながらも、建設的な方向へ進む資質をもっているようである。私は、この人間の成長力を信じ、今もなお、迷い、とまどいのくり返しの中で、暗中模索しながらも、その時、その時を精一杯生きようとしている。

（東京・駕籠町幼稚園）

私のまよい

山本秀子

〝ゆうこのすきなのわ、あやとりとびやのとなわとびです〟（叔父にあてたゆうこの手紙から）

五歳二ヵ月の年少組の冬休み。祖父の入院で慌しい生活。あそぶ時間も充分に保障されない毎日であった。そんな中、病院への、祖母の家への往復の電車の中で、毛糸の端であやとりを始めたのがきっかけだった。少し前までは指がよく分かれず、相手をしてくれた叔父に八つ当りをしていたあやとりだが、日一日としっかり指を突っぱったりくぐらせたりできるようになった。そうなると「おしえて、おしえて」で、梯子・とんぼ・ゴム・朝顔……と親の手持ちを全部吸いとり、「もっと何かないの？」とついてくる。あやとりの本から、そして挙句には自分で創り出して（？）いる。同じ頃、折り紙も好んで繰返している。そしてその勢いは、購入してまる二年、エレクトーンに向けられた。自分のうたう音を指で捜し、何度も何度も迷いさわっているうちに、曲になっている。熱を出して寝ていた日も、突然、心に浮んだのか、ガバッと起き上り弾いてみて、それまでひっかかっていた音を捜しあて、ニッコリしていた。——そこには、ゆうこの指や身体が自由に気持良く動きはじめたこと、思うことに集中する力と真剣さ、大人への従順さ、知識への敬意などが淡いながらも明らかにとらえられる。そして子ども自身が、戸惑いながら解決の糸口をつかみ、存分に満足する経験をしている姿がある。——

現在の私の生活は家庭が中心であるから、とりわけ子どもとの間での「まよい」が多い。子どもを正しい基準へもっていくこと（品性を育くむ）と、子ども自身の持味をつぶさぬこと（夢、柔軟性、創造性を育くむ）との間に平衡を保とうとする時にまよいが出てくる。子どもの内側にみえない形で育つものと、外側にはっきり育ってくるものとの間の、力点の置き方でもまよいが出る。そのどちらも、時間をかけて子どもを知り、強さとやさしさとをもって子どもを扱っていかねば育たないのだが、親の心にすきまができると、世の風潮につけこまれ、揺いでしまう。「……やっぱり私だけでやっていてはダメなのでは、どこかに習わせなくては」とか「今はこの子に○○を育てることが大切と思っているけれど△△こそ先にしていかないと、

先で子どもが困るのでは」とか。事実、エレクトーンに関しては習わせようかと何度も迷っていた。

でも、はじめに述べた経験のように、子どもの行動の中に、その時親が努力し、力点を置いているものがごく自然に集約されてきて更に予想していないものに連らなり拡がっていく反応をみた時、それまでの「まよい」は吹き飛び、確信に変っていく。（生活感覚としては決して固いものではなく、子どもを見守っていて、どうもひっかかる、どうもあそこが気になるという感じがなく、お互いに安定した気持で自然に接しあえる生活ができるということなのだが）

それでも毎日、大なり小なり戸惑い、悩みながら生活が流れていく。そしてそこにとどまっていることはできない。そんな時、自分の心の中を深く思い廻らすと「惑い」を整理することができる。子どもとの間でのまよいと思っていたことが、案外自分の生き方でのまよいに連らなっていることがある。自分の考え方の癖や弱さがみえてくることがある。本当に悩むべきことでないことで悩んでいる場合もある。「惑う」に対する「惑わすもの」が何かを見抜くことができ、初志・原点に立ちかえることができる。また、いつも自分に大切な、健全な考えで心を満たしているなら不必要な惑いで惑わされることも少なくなる。

今の私は「二十代の時の迷い」から少しずつ変ってきて、まわりの目をあまり気にせず（居直りかもしれないが）「自分そのもの」を出して吟味するようになってきている気がする。そして、大事なことの決定を自らは回避してしまいがちな弱さを痛感し、改めて「自分の生き方」を決定するところで惑わされ、迷っている私をみるのである。